



由平梅翁著

二二〇四

古俳諧

下卷

大屋書房

TEL (291) 0062

東京, 神田, 神保町, 1, 1





911.32
N870



文学部
中村俊定
71

早稲田大学
文学部図書

1057

45-5089



此の巻は、*Shōmei*の巻

*Shōmei*の巻

*Shōmei*の巻

*Shōmei*の巻

*Shōmei*の巻

*Shōmei*の巻

*Shōmei*の巻

*Shōmei*の巻

*Shōmei*の巻

*Shōmei*の巻

照月の休も若くは

湯漬もむきとらんまらぬ
油のすまふ花ちほぬまは子使
形死候あましく喜れは
汝儂のさ事ハあてとせま
外行草のちうふらうあ
私疾そのあけて一たふらす
余志は家の麻のまぬへ
柄抄よりつゝも京下の中
あしはもつゝのあし酒意

愚問六十句

長安七

傳はくは天寶の夜くし
鼻より入てはりしは
あひいたちうり候のもこ
紅梅一句くのまもやあは
おのほらも一のこ後あつり
すういふはくくもすうら
あまハ柳子梅あまこま
うんはは束つら梅た下り
名もてかくとこし千念合
たうれあつら

西葉子判

ふらふらと月をうらむ
是をたふさく天の多
くもつたの口もあれ
ふあちりふ林の好物のま
らふふの精をよめて

舟夕子

由平

半端くは月をうらむ

月をうらむと成く川元

秋風も勝は月をうらむ

道系子万勝の夕夜

識馬の馬をうらむ

こころをうらむ

ふらふらと月をうらむ

朗林の粉をうらむ

茶餅のえいふをうらむ

鈴屋のむらさきをうらむ

ひらひらと月をうらむ

うらひと月をうらむ

ふらふらと月をうらむ

たふさく月をうらむ

舟をうらむ

舟をうらむ

おはつかいしんしんしんしん

かつかいしんしんしんしん

上を名をまらうのしんしん

仲丸様よつぎんしんしん

花のあかしんしんしんしん

延寶二年 行倉しんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

しんしんしんしんしんしん

出入するや入は抱き入

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

外は事なほ前点飾は能もほ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

おのゝこゝろのこゝろ

七十の薙をそよの梅川住

ゆつかり子代をこゝの彦松

屠蕪白敷まらこゝの

つれづれのつれづれ

外りとして武略さくゝひらめ

一才葉よハ周東まうへも

愚問六十一句

長女九

西梅花翁

句毎子目を知らるゝ

うれゝゝ

西梅花翁

Faint handwritten text in the top right corner, possibly bleed-through from the reverse side.

昭和六年十一月

Faint handwritten text in the middle right section, including the word "LONDON" and other illegible characters.

船港の通年古の下地古新

昔人の上代法をとりて新
うまへの意行のねふこを
美一はあつてゐるの餘り

未学

新影の影のあ。わらわら

新 あまそそるさむ 影の一時

影 あまそそるさむ 影の月入

又 あまそそるさむ 影の月入

影 あまそそるさむ 影の月入

虎 あまそそるさむ 影の月入

鬼科のおもひをいそいで
福入ニ種まきしてうねのくさきやう
考うりしはもゆる精うひのそ

大井川回系庫成後にて
は後れ子と鬼のこころ
考ありしにせしむる一り

看板の徳をさけのらありし
園地のりる大徳のりり也

おつりまきしちし徳をいふとせ
おまきしちし徳のりり
りりりりりりりりりりりり

二ツ
りりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりり
代の福をぬの二おし
りりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりり
鬼と
りりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりり
手帳の内なるはあはれらゆき
りりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりり
左方のひもくりりり
りりりりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりり
おまきしちし徳のりり
りりりりりりりりりりりり

世方のすむじ一葉れ家とるせ

対 家方のすむじの男なりひり

東五んひりれら飛雁状

対 あつ時つり家のすむじりあつ

さきつりあつあつあつ

対 瀬くたるふの根く

きんたつのはまの影

対 葉れ房つあつりあつあつ

対 葉れあつ入つあつあつあつ

ま田路にてあつあつあつあつ

対 樹のあつあつあつあつあつ

まあつあつあつあつあつ

対 あつあつあつあつあつあつ

対 あつあつあつあつあつあつ

対 あつあつあつあつあつあつ

対 奥方の金佛とありあつ

あつあつあつあつあつあつ

対 葉のつあつあつあつあつ

対 あつあつあつあつあつあつ

対 信也時代の秋月をあつ

対 地子ゆゑん秋の柳つあつ

あつあつあつあつあつあつ

対 樹つあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

対 樹あつあつあつあつあつ

対 衣あつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

対 あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

対 あつあつあつあつあつあつ

対 あつあつあつあつあつあつ

対 あつあつあつあつあつあつ

一休子園の子は編みし

まきまき編みし

月夜にあらはるる

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

ウ

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

のさすりしは

月をみるゝのよはぢにわ

ねる鹿ののちも秋の夕ぐれ

白鳥のやまを海をあら

蝸牛の角より生かまひきり

破るもも昔のむねをい終

代をい力年よる流るるら

鷹爪のいけれ他人をのれや

さそあめあつ穴つら

食ら物よは浮きあはるるえ

帯帯れあつらうりける流

初ね海よあつまをそのト

尾上のりひよ一寸の秋

ちつちつと月影赤き標の尻

たのすく人をねちち乃すき

大つひひひひひひひひ

をまの標をあけおの

斗のあつちよすくあたまよ

新友あつあつあつあつ

意をたし海正坊のあつちよ

たつちあつあつあつあつ

あつちよあつちよあつちよ

あつちよあつちよあつちよ

あつちよあつちよあつちよ

頂礼しては地をなす

備も本をさるる白なわちあり

まへに操りてまゝのまゝあり

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

いぬきまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

あまのり板道み十丁

對るもまき梅のハコ友部云
不花山茂たらくもい極

外いまなま代このむれん
昨落のね屋勝りけり上

若く履れまのもいせつな遠く
若く履れぬを遠くもいせつな遠く
醫者もつと醫者も又あるこら

付くもるれをい毒めし
百歩長あつたあやまつら
世後の乾けの極り汁

ふまのわのい摺の浦をら
若者のそけのまハ神のね

若者一書再子録の極
一書おのりうく

らいの哥年の切え男入

がらのあきれ登人力まで
この年あつてけうもあつた
ならあ事あるはらの浦風

船いもたもたうらのふれも
物のまのいたるら駕むれるる

とつとひらけ毒れ本陰のられ
明く交人し的をそめれ

まいとらのあしつくらの
舞れまらのら風く

あらのらのらのらのら
あつた
二上らのらのらのら

推し集の標うくはるゆるのん
第の先んま〜しりるる
十位や夕〜の月むな
衣の棚の仕りの男にむ
花葉の白ひも花もほほ
よめ代茶葉子入てはは
お薫くろれはあひるまの
ハ百八の影をぬひは
こまあひるまは上の端に
なまか抱もこ入ねるこ
とりかたはなまの影もはらひ

お薫くろれはあひるまの
ハ百八の影をぬひは

お薫くろれはあひるまの
ハ百八の影をぬひは
こまあひるまは上の端に
なまか抱もこ入ねるこ
とりかたはなまの影もはらひ
お薫くろれはあひるまの
ハ百八の影をぬひは
こまあひるまは上の端に
なまか抱もこ入ねるこ
とりかたはなまの影もはらひ
お薫くろれはあひるまの
ハ百八の影をぬひは
こまあひるまは上の端に
なまか抱もこ入ねるこ
とりかたはなまの影もはらひ

寄附してゐる小回の編費
は年貢として村に九月
暮に成えまつてしまふから
外は寄附金で成る所は
先づ先づと成らして
小町の町も成る所は
長崎よりその町もた
耳のあつた橋を
やういふ入らぬ町は
簡略の世を管する
の事案は種々の

お話するに成つておるもの
合はらうと成らうと
其の此の町は海を又り
外にやういふ町は
漢字を永くのは縁起
勝をさすは我々の
よな家の事成る所は
教の編成やくたつ
大船のあつた町は
行つた事成る所は
吟を成る所は

そなたにぬくこと思ふ人

その月の光路のちの拍子

女流のちのちのち

百のちのちのちのちのち

揚子江のちのちのちのち

ありあけのちのちのちのち

外なるちのちのちのちのち

外なるちのちのちのちのち

外なるちのちのちのちのち

外なるちのちのちのちのち

外なるちのちのちのちのち

外なるちのちのちのちのち

